

目次

夜間病棟

5

訳者あとがき  
323

解説 野村恒彦  
326

## 主要登場人物

サラ・キート	セント・アン病院の婦長
ランス・オリアリー	警察官
メイダ・デイ	看護婦。サラの同僚
ルイス・レゼニー医師	セント・アン病院の院長
コロール・レゼニー	レゼニー医師のいとこ
ジム・ゲインセイ	レゼニー家の客。技術者
フランツ・バルマン	レゼニー医師の助手
フレッド・ハイエク	研修医
ジャクソン	患者
ガステイン	患者
ソニー	患者
ミス・ドッティ	看護婦
オルマ・フリン	看護婦
ヒギンス	用務員

夜間病棟

ウィリアムとマーガレット・グッドへ

## 第一章 不愉快な晩餐会

セント・アンは古い病院で、風雨により変色した赤煉瓦の塊が四方に広がり、壁は緑色のツタに覆われ、B市から少し南東に入ったサッチャー・ヒルの斜面に建っている。建物は至る所が改築または増築されているが、ユーカリ材とクルミ材で仕上げた堂々たる強固な壁は当時のままだ。病室は古風ながらも広々としていて、全体的に確固たる威厳ある雰囲気をもっている。華々しい一八九〇年代においては、サッチャー・マンションという呼び名で知られていた。

しかし、時の流れとともに変化も訪れた。低く幅のある窓が増えて最新の水道設備に電気が導入され、各階には電話が置かれた。いくつかの棟が増築され、古い外壁に合わせ、あらかじめ風雨で変色した煉瓦が使用された。西側に正面玄関があり、重厚感のあるドアと石灰華トコバネの大きな柱、そして、曲線を描いて伸びる私道が人目を引く。しかし、南側の南病棟の一番外れにあるもう一つの入口は、ほとんど人目につかない。小さな半円を描いたコロニアル式の玄関で、ドアにはガラスがはめ込まれ、静まり返った病院の廊下に続いている。目の前は細長い草地で、植え込みや林檎園、柳の木立ち、もみの木の茂みが広がっている。ドアを出ると、丘へ登る小道につながり、下手の低木や茂みの向こうには曲がりくねった埃っぽい道路が見えるが、めったに通る者はない。

南病棟は、セント・アン病院で一番新しく改築された棟で、当時の十八号室は最も快適で日当たり

の良い病室だった。そう、その頃は。現在、十八号室は二人の看護実習生によって週に二回、埃が払われ、掃除がなされている。場合によっては事務局長のミス・ジョーンズが、十八号室に患者を入れようとするが、町から来た患者たちも新聞の見出しを鮮明に覚えていて——『十八号室に三人目の犠牲者』といったような——その数字をほのめかすと、ただちに拒否した。町の外から来た患者は、それほど深刻な問題ととらえていないようで、異議を唱えることもなく、当てがわれた部屋に入るが、数時間、十八号室で過ごす、必ず違う部屋に移ることを要求する。一度、全棟の病室の番号を変えてみたりしたが、結果は同じだった。十八号室はやはり十八号室で、たった一度の例外はあったものの、そこに入れられた患者が夜中までそこに留まることはなかった。

こういった事態は、十八号室の歴史を不思議と嗅ぎつけた患者たちに起因するのか、それとも、明らかに不吉な様相をその部屋が呈していたためなのか、私にはわからない。看護婦たちは不幸な出来事について口にするのを固く禁じられていた。

その不吉な様相については私も少なからず頭を悩ませた。病室は他の部屋と同じく衛生的で、実用的な家具を備え、南東の角に位置し、囲いに覆われた果樹園や緑の深い茂みを見渡すことができる。当然日よけは適切な位置まで降ろされ、他と同じくゴム引きの床で覆われているのだが。決定的な部分、つまり十八号室の壁そのものが、不快な空気を発しているのは事実だった。清掃員たちの努力にもかかわらず、はつきりと黒ずんだ染みが狭いベッドの足元に残っていた。

そのあまりにも静まり返った病室に五分でもいると、背筋がゾクゾクして手のひらがじつとりと湿りけを帯びてきて、逃げ出したくてたまらなくなるのだった。胃が丈夫で、神経が図太く、想像力の乏しい私でさえも。

真夜中から早朝にかけての長く暗い時間帯、二回目の見回りがあがるが、今でも私は不気味に閉ざされた十八号室のドアの前を避けて通っているのだ！

あの夜が事の始まりだった。丘の中腹にあるレゼニー医師のコテージで、コロール・レゼニーが晩餐会を催した。病院の南口を出て、小道を上がったところにコテージはあった。彼女は、午後遅くなつてから慌ててメイダ・デイと私に電話をしてきた。どうやらレゼニー医師の友人である若き土木技師が、ウルグアイの橋梁工事現場からロシアへと向かう途中、思いがけなく立ち寄ることになり、晩餐会を開くことになったらしい。いつもならコロールの晩餐会に出席するのは、あまり気が進まなかつた。食事は風変わりな味付けで、とてもおいしいとは言えない。だが、旅の話や技師という職業に魅力を感じた。その夜は午前零時まで当直もなかつたため、行く約束をした。メイダはあまり気乗りがしないようで、いつになく難色を示していた。電話に出ている彼女の横に立つと、声にまったく誠意がないのが感じられた。

「心配はいらないわ」メイダが受話器を戻し、コロールの快活でハスキーな声が聞こえなくなると、私は言った。「心配はいらないわ。気晴らしになるかも。それに、セント・アンの今夜の夕食は冷たいロースト・ビーフよ」

メイダは笑った。

「コロールの晩餐は、いつだって——気晴らしにはなるわ」かなり皮肉をこめて彼女は言った。「行く気がしなかつたけど、彼女、かなり困っていたみたいだから。その男性、今日の午後着いたばかりで、明日の朝には出発するんですって。コロールも、私たちがこの二週間、二回目の見回りに就いて、十二時まで非番だと知っていたのよ」

「私は、たぶん——」事務室から出て、二人で南病棟へと通じる狭い廊下を歩きながら考えた。「シルバーの薄絹のドレスを着て行くわ」

メイドは頷き、印象的な青い瞳でまっすぐに私を見つめた。彼女が正看護婦としてセント・アンに勤めて三年になるが、その青い瞳は見れば見るほど魅力的だった。

「ぜひ、そうするといいわ」彼女は同意した。「そして、髪は高く結い上げるように」

メイドは私の髪を惜しげもなく褒めてくれる。私自身も、豊かな赤い髪を気に入っている。一度も髪を切ったことはない。私くらいの歳で、高過ぎる鼻を持ち、肥満気味で、そばかすがあって、そして地面にどっかり根を生やしているような女性は髪を切るべきではないのだ。

シルバーの薄絹のドレスをまとい、華美な装いを黒っぽい絹のコートで覆って、何か問題はないか最後に確認するために南病棟へそつと入っていった。六月のその夜は曇っていた。あえて言うまでもないが、長い間、その棟の看護主任をやっていると、自然と責任感が身につくものだ。夕食を無事終えて、七時の検温も済み、腸チフスの回復期にある十一号室の患者の熱は少し下がっていた。六号室の患者は、新しいギブスに慣れてきたようだ。

六号室の患者が、私のドレスの髪をうっとり見つめていた。

「おめかししてるの？」と彼は言った。感じの良い少年で、大腿骨を接合するため、あと六か月ギブスが必要だった。

「彼女、すてきでしょ？」戸口からメイドの声がした。私が生の方へ振り向く前に、少年が目を大きく見開くのがわかった。

メイドのパリッとした白い制服姿は見慣れていた。そして今、黒い髪と鋼はがねのように煌きらめく青い瞳、

派手に見えない程度の頬と唇を引き立たせる鮮明なピンク——これらに加え、ガラスのビーズがほんの少し散りばめられた、うっすらと体に張り付いているダークブルーのデイナードレスは、少年と同じくらいに私の心を捉えた。

「うわあ、すごい！」彼はため息を漏らした。

彼女はちよつと肩を揺らして笑った。少年の目に宿った称賛は痛ましいほどに純粋だった。

「ばかなこと言わないで、ソニーったら」メイダはそう言ったが、その瞳は輝いていた。「新しいギブスはどうか？」

「うん——問題ないよ」ソニーが得意げに答える。

「戻ったら、ここに来て、パーティーがどうだったか教えてあげる」メイダは約束した（十時間前に変えたギブスが苦痛で、なかなか眠れないだろうとわかっていたのだ）。

「すごいや」再びソニーが言った。「ミス・デイ、本当にそうしてくれる？」

「ええ」彼女の魅力の一つでもある、真面目で誠意ある声で答えた。「用意はいい？ サラ」

私はメイダの後について、病室から棟の南端へ向かって廊下を進んだ。ドアを抜けて小さな玄関を横切ると、果樹園を抜ける曲がりくねった小道に出る。小さな橋を渡り、甘い香りの漂うアルファルファの野原を越えると、レゼニー・コテージがある。

小道は二人が並べるほどの幅がない。メイダが先を歩き、知らず知らず私は、彼女の細い肩や優雅で隙のない身のこなしを目で追っていた。メイダは、たとえ波の上に立っていても、いつも落ち着き払っているような印象を人に与える。常に勝利を手にしながらも、まったく尊大なところがない。彼女は希有な存在で、生まれながらの看護婦なのだ。特に気難しい心気症の患者もうまく扱い、怒りを

顔に出したり、ソニーの病状に取り乱して涙することもない。むやみに彼女を褒め称えるつもりはないが、あまりにもすばらしい女性なので称賛せずにいられないのだ。私も若い頃、彼女のようにだったら、もう少し違っていたかもしれない、とついつい考えてしまう。けれども、もちろん私はメイダのように美しくもなく、美しかったこともない。

コロールが私たちを待っていた。他の客たちはすでにカクテルを手にしている。レゼニー医師が、その朝、共に手術を行ったことなど忘れたように、丁重な挨拶の言葉をかけてきた。背が高く、色が黒く痩せていて、異常なほど礼節をわきまえた人間だ。服装に関してもかなり手厳しい判断を下す。彼はメイダの外套を取るのに少し手間取り、そのあいだ何か低い声で話していたが、私には聞こえなかった。メイダは素っ気なく返事をして背を向け、細く黒い眉で不快感を示していた。

レゼニー医師の助手、バルマン医師もいた。痩せた中背の男性で、細く青白い顔に、高く広い額は人の良さそうな印象を与える。常に私心のない、まるで夢を見ているような深みのある瞳。先の尖った顎鬚はいつも乱れている。それは酸の染みついた細い指で神経質に触る癖があるからだ。淡い色の乏しい髪は、くしゃくしゃで手入れが必要だった。ネクタイは曲がついていて、服装は堅苦しく時代遅れなものだった。

フレッド・ハイエク医師もいた。〈Hiyec〉<sup>ハイエック</sup>と発音するのだが、看護学生たちは、ふざけて〈HiJack〉<sup>ハイジャック</sup>と呼んでいた。彼は研修医で病院に住んでいる。夜間、電話に出たり、傷の手当てをしたり、急患に対応したりするため概して重宝がられていた。他の二人の医師よりもかなり若かったが、すっかり成熟しきったようなたくましい体付きのため、年齢よりも上に見られた。角張った頭に赤らんだ顔はどこか異国風な面影があり、こじんまりした黒い口髭に、つり上がった<sup>まぶた</sup>瞼の下の小さな黒い瞳が、堅苦

しいような抑制されたような奇妙な印象を与える。しかし、物腰は柔らかくさわやかで、はつらつとした雰囲気は魅力的と言えないでもない。

そして私の目は金髪の体の大きな若者に留まった。コロールが話しだすと、彼は前に出てきた。

「ジム・ゲインセイよ」彼女はメイドにカクテルを勧めながら、クリームブラウンの肩越しにさりげなく告げた。

彼は、私に何やら丁寧な言葉をかけたが、その目が熱心にメイドを見つめているのがわかった。目を離すことができないようで、視線は同じところに留まったままだった。私はじつくりと、この背の高い若者の品定めをしてみた。日に焼けた手と顔、世界中で橋を造っているらしいが、まだ大学生くらいにしか見えない。実際、薄いホワイトゴルドの煙草入れの表面には、男子学生クラブの紋章が輝き、彼はそれを開いて手に持ったままだった。メイドを見た途端、煙草を出そうとする手が凍り付いたようだ——。しかし、もっと近くで観察してみると、早まって下した評価を訂正しなくてはならなかった。目の周りには皺があり、日に焼けた眉は真つ直ぐに神秘的な線を描き、鼻の上でつながりそうになっている。顎は貧相で冷酷な感じがする。さりげなく着こなしているタキシードには、たくましい体の線がはっきりと見て取れ、余分な若々しさは少しも感じられない。ここにいるのは人を扱うのに手慣れている男だった。そうだ、きつと自分の目的のためには他人をうまく丸め込むのだから。それとも、私はゆがんだ目で見ているのか。

そのとき、コテージのたった一人のメイドであるハルダグが台所から息をはずませ飛んできて夕食を告げた。私たちは、蠟燭ろうそくの灯った長いテーブルのそれぞれの位置についた。

スープはまずく、魚にはほとんど味がついていなかったが、バーミア風のハムはなかなかの美味

で、私の心は次第に和んでいった。ちらちらと揺らめく灯火、銀器やグラスや花の輝き、男性陣が白と黒のコントラストを成し、メイダの赤と白の美を引き立てている。そして、コロールの派手やかな魅力。妙な形容詞だが、コロールは確かに魅力的だった——人目につくような好色な魅力。その誘惑に少しでも抗うことは難しかった。彼女はテーブルの末席にジム・ゲインセイと座り、もう片側にはハイエク医師がいた。彼女の光沢のある金色の髪は緩やかなウェーブに整えられていた。金のスパンコールのあいだに緑色の生地が煌めいている奇妙なドレスをまとっている。ドレスは彼女の体に滑らかにまとわり付き、背中の部分が極端に開いて茶色っぽい肌がウエストの辺りまで見えていた。そのようなドレスを院長の家政婦とも言える女性が着ていることに、病院の理事たちがどう反応するかは充分予想されるものだった。コロールはレゼニー医師のいとこで、マダム・レゼニー亡き後、彼のために家の管理を行なっている。彼女のこれまでについてはほとんど知らないが、私は以前から興味を抱いていた。決して詮索好きなわけではないが、いったいどんな事情で、私たちの知っている茶色の肌をした金髪のコロールが、こういった状況に置かれたのかと、しばしば考えることがあった。彼女は、まさに華麗なペルシア猫そのものだった。瞳は淡褐色で、妙に優雅な怠惰さを身につけていた。

晚餐のあいだの会話はつまらないものだった。コロールはあまり食事に関心がないようで、ぼんやりしながら、偏った見方をすれば、何気なくジム・ゲインセイの気を引こうとしているようだ。そして、ジム・ゲインセイの視線は、ひたすらメイダに注がれている。他の誰も気付いていないようだが、私の目には明らかだった——レゼニー医師だけが気付いていたかもしれない。煙で、彼の細く黒い瞳はほとんど見えなかったが、煙草の煙を絶え間なく吐き出しながら、すべてを見ているようだった。バルマン医師はひたすら食事に専念していた。研究室での実験に夢中になっていて、日中何も食べて

いないと言っていた。

「でも、それを放つて食事をしに来たわけね」コロールが微笑んだ。

「いえ、違います」サラダから顔を上げずに、バルマン医師はきっぱり否定した。「実験はどうにか終えましたが」

「あら、そう」コロールが言うと、レゼニー医師の薄い唇がかすかに曲線を描いた。

「それで、あなたはウルグアイで架橋工事をなさっていたんですね？」私はジム・ゲインセイに話しかけた。彼の鋭い瞳が、こちらに向けられた。

「そうです」

「ウルグアイも、今では経済が発展して、ヨーロッパ風に文明化されたのかしら？」彼が、今まで自分に降りかかった冒険談を話してくれないかと期待していた。私には探検家の本能がありながら、この地にとどまっているのが習慣となつてしまったため、代わりの人間から旅行談を得る必要があつた。

「そうですね。田舎の方はまだある意味、バンダ・オリエンタル（植民地ウルグアイに対するスペイン人の呼称）のままですが」

「『英国が失いし。パープル・ランド』（一八八五年にウィリアム・ヘンリーによって執筆された十九世紀ウルグアイを舞台にした小説）」メイダがそつと言うと、ゲインセイはすぐに興味深い眼差しで彼女の瞳を見つめた——興味だけではなく、もっと違う何かがあるにはあつた。

コロールはまぶたをパチパチさせた。

「ドクターの書齋にコーヒーを用意してちょうだい、ハルダー」彼女は言った。「それから、窓を開けて」